

宿縁

九月号

千葉県市川市国府台五丁目二十六番二十九号
浄土真宗
本願寺派
中原寺
TEL 〇四七―三七二一〇二九二
FAX 〇四七―三七二一〇二六二

親鸞さまだから
ありがたい



テレビ中継されている東京オリンピックも、コロナ感染拡大のニュースに脅えていて、人間の老いや病や死はそれとは関係なく誰にも確実に迫っています。
昨年、科学哲学者の「死ねない時代の哲学」は興味深い本です。
いま日本は世界でも有数な長寿国となりました。2021年版の世界保健統計によると平均寿命が最も長い国は日本で84, 3歳

(女性87、74歳。男性81、64歳)です。そして心身ともに自立し、健康的に生活できる期間を「健康寿命」といいますが、日本は74、8歳です。

1994年に永六輔さんの「大往生」、そして2016年に佐藤愛子さんの「90歳。何がめでたい」の本が大きな話題となりましたがご記憶でしょうか？

今から30年近く前は「長生きして豊の上で大往生」が望みでした。百歳時代を迎えた今は「長寿〓何がめでたいというのか」と長生きをぼやく時代になりました。

このように時代はたゆまず変化し社会を構成する人びとの考え方も変わってきています。しかし何人にも免れ得ないのは老・病・死の事実です。

人生百年時代にある私たちが、わきまえておくべきことは何か。「自分の死に方を自分で決めなければならぬ」と、村上陽一郎さんは問いかけています。

自分を含めたみなさんの周囲を見れば、「老老介護」、「痴呆症」、「介護施設探し」、「少子化による後継ぎの問題」等々、いずれかに遭遇しているのではないのでしょうか。

「なるようにしかならない」、「考えたところで結論が出ないのだから元気なうちに楽しむべし」、「死んでおしまいだから海や空に残った灰はまけばよい」という意見

を持ったとしても本当にそれで安心なのだろうか。無責任と言えないだろうか。人間の考えをどこまでも延長したところで着地点は見出せません。ここに先人たちが人生を通して後続の私たちに伝え願ってきたのが宗教の道であり信心の世界です。

平均寿命が(貴族の場合)40歳〜50歳くらいであった鎌倉時代に、90歳というずば抜けた人生を歩まれた親鸞聖人が79歳の時に関東の門弟の質問に答えられたお手紙があります。

『死に臨んで阿弥陀仏や菩薩方のお迎えがあるというのは、もろもろの善行を積んで浄土に往生しようとする立場でいうことです。それはその人が自力をたよりにすることからです。臨終を問題にするのは、諸種の善行を積んで浄土を願う人だからです。その人はまだ真実の信心を得ていないからです。：真実の信心を得た人は、抱きかかえて捨てられない阿弥陀仏のはたらきゆえに、往生が決定した身となるのです。したがって臨終の時期を待つことも仏・菩薩のお迎えを期待する必要もないのです。信心が定まるときに往生もまた定まるのですから、お迎えの儀式も不要です。：』

臨終に際して阿弥陀仏のお迎えを得て浄土へ往生するというのは、平安時代以来の特色で、たとえば藤原道長が法成寺の阿弥陀堂で「弥陀如来の御手の糸をひかへさせ給ひて」往生をとげたことはよく知られるところでは、わが親鸞聖人は、このようなお迎えを期待するのは阿弥陀如来の真実のお心を理解しないものと教えられたのですが、お迎えのご

利益を期待するあさはかな人間の心根は、現在でもなかなか払拭できず、また仏教宗派の中にそれを助長させるような儀式があることは残念です。

人間の果てしない妄念と欲望を解決し、真のやすらぎをさとられた釈尊の教え(仏法)は、さまざまに国々や民族に伝えられました。そして仏教の宗派全般を分析して浄土往生の真髄である「本願の法(阿弥陀如来のはたらき)」だけが大乘仏教中の最高の教えであることを高らかに宣言されたのが親鸞聖人です。阿弥陀如来の真意とは、「迷いに沈む生きとし生けるものを必ず真実の世界(浄土)に仏願力(本願力)一つで生まれさせる」との誓いです。それを「本願の法」といいます。

たとえば、真の母親の存在はわが子から頼まれたから育てるものではありません。何も知らぬ乳児がその子の生きるすべてが母乳となつて用意されているのです。母乳は母親のものであるけれど偏にわが児のものです。

大安心(さと)り〓光明の世界は、濁世にさまようすべての人間(闍)の力をどんなに積み重ねても達することは不可能です。親鸞聖人は、そのことを身をもって知り、かねてよく知らしめしてこの私の身を引き受けてくださる如来の本願力廻向(ほんがなりきえこ)うが南無阿弥陀仏(名号)と言葉になつていま届けられている。そのはたらきを聞いてうなづいたそのとき、私の往生は決定し、それからは常に如来・諸仏に護られているのだから、臨終のお迎えは期待する必要がないことを先のお手紙に述べられていたのです。仏法を聞くとは、このところを聞く一つなのです。

【寺灯雑記】

○亡き人に導かれ、孟蘭盆会法要勤まる
8/8

コロナの感染拡大に台風の接近など、外出に二の足を踏む状況の中ではありましたが、参詣者とともに孟蘭盆会法要、全戦没者追悼法要が厳修されました。

読経時間の短縮や座席間隔を確保するなど、コロナ感染症対策に、細心の注意を払ってお勤め致しました。

ご法話では、茨城県ひたちなか市の増田廣樹師より「諸法無我」の道理についてや、私がお盆をお心をお聞かせいただき、私がお盆に際してそれぞれに亡きかたをとおり、改めて自らのいのちと向き合う縁となりました。

○階段に手すりを設置

足のご不自由な方のために本堂正面の階段と客殿からの渡り廊下に手すりが設置されました。

また聞法会館入口には近日中に掲示板が設置されます。道行く人たちの目に止まることを願っています。

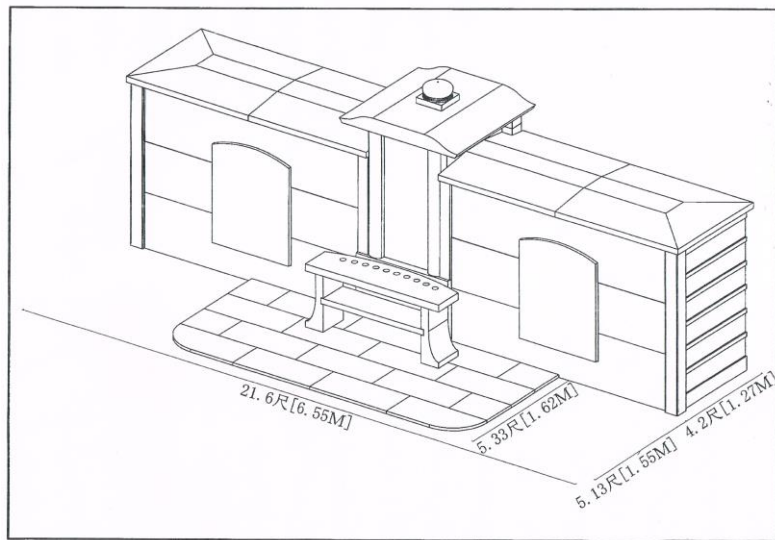
○個別永代廟の完成予想図を公表

先月号にてお伝えしたように今年十一月中旬に建立を予定している個別永代墓の完成予想図ができました。

横幅約6・5メートル、奥行き約1・3メートル、高さ約2メートルの廟の中央には、親鸞聖人のお書きになった六字名号「南無阿彌陀仏」を彫り入れ、ご本尊となります。

廟前には、多くのかたがお参りできるように、供花入れを数多く設置するようにいたしました。

今後も進捗状況をお伝えいたします。詳細をお聞きになりたいかたは、お寺までご連絡ください。



【仏教語講座「法螺」(ほら)】

「ホラを吹く」といえば、大袈裟なことを言う、うそをつくといった意味に使われていますが、もともとは、お釈迦さまの説法のことを指しました。

お釈迦さまの説法は、いろいろな表現でたとえられています。「獅子吼(ししく)」「は有名ですが、「大ボラ(大法螺)を吹く」も、そのたとえの一つなのです。

法螺の「螺」とは巻貝です。この巻貝の端に笛をつけて一種の楽器となりました。

ホラ貝です。インドでは、人を集めるときにこれを吹きました。

戦場でホラ貝を吹き、出陣の合図をしましたが、その音が遠くまで響き、軍勢を奮立たせたのを、仏さまの説法のとえとしたようです。

經典に「大法雨(だいほうう)をふらし、大法幢(だいほうどう)を建て、大法螺(だいほうら)を吹き、大法鼓(だいほうこ)を撃ちたまえ」とあるのがそれです。それが「お釈迦さまと同じように偉そうなことを言う」という意味を経て、今のようになったこととです。

ちなみに、おつとめの「重誓偈(じゅうせいげ)」にも「説法師子吼(ししく)」とありますね。これは、仏さまの説法を獅子の吼える(獅子吼)声にたとえたものです。「獅子のほえる声が百獣を畏伏(いふく)させるように、仏の説法はすべての衆生を信順させる」という意をあらわすと、『註釈版聖典』に説明されています。

(大乘2019年10月号より転載)

【法要・法座のご案内】

◇秋の彼岸会法要修行

*九月二十三日(祝日) 午後一時
おつとめ・仏説阿彌陀經
法話・阿満利磨師

(明治学院大学名誉教授)
講題:「なぜ「ただ念仏」なのか」
近著「教行信証」入門(筑摩書房)

酷暑続きと新型コロナウイルス感染が収まらない中にもいつしか秋の虫の鳴き声が聞こえて

まいります。

皆様には如何お過ごしでしょうか。お見舞い申し上げます。未だかつてない不自由な生活に困惑されて居られることと存じます。秋のお彼岸を迎える季節となりました。どうぞお気を付けてご参詣ください。

○教行信証を学ぶ(信巻)

*九月十八日(土) 二時
講師:前住職
テキスト:教行信証(岩波文庫)

○いのちの居場所を考える会

*九月三十日(木) 十時
「場の思想」を手掛かりとして、人間を含めた多様な生きものが地球で共存しているにはどうしたらよいかを考える。

○婦人会法座

*十月二日(土) 一時
正信偈解説

※九月四日の婦人会法座並びに壮年会法座はコロナ感染緊急事態宣言につき、中止いたします。ご了承ください。

【九月の掲示板のことば】

スマホを見つめる
時間はあっても
親子で向き合う
時間がありますか

○YouTube 中原寺で

前住職の法話を配信中です。(月2回)